

令和元年6月25日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02108

研究課題名(和文)セザンヌの<芸術論>に関する総合的研究

研究課題名(英文)General research on Cezanne's theory of art

研究代表者

永井 隆則 (NAGAI, Takanori)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授

研究者番号：60207967

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：セザンヌの芸術論の形成をシャルル・ボードレールからの影響、エミール・ゾラとの共同作業という視点から明らかにした。「気質」「個性」「独創性」といった価値観をゾラと共にボードレールから継承し、サロン絵画の商業主義に対する批判をゾラと共有する事で、セザンヌが、独自の美学と技法を確立したことを示す事ができた。

また、セザンヌの反近代主義思想は、ボードレールの影響下で形成され、さらに、同時代の哲学者、アンリ・ベルクソンの思想、彫刻家、オーギュスト・ロダン、工芸家、エミール・ガレらの芸術論と共鳴し合い、同時代の知的環境の中でもセザンヌの芸術論が育まれたものであった事を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は最終成果として二つの学説を提示した。1)セザンヌがボードレールの芸術論や思想を継承し多くの着想をそこから得ているという学説。2)セザンヌがゾラと共同作業で独特の芸術論を練り上げたという学説。以上は、これまで全く指摘されておらず、ボードレール/セザンヌ/ゾラ研究の領域に新知見をもたらした。

また、本研究は、セザンヌの芸術論を同時代の知的環境に位置付ける試みを行ったが、これは、セザンヌの芸術活動を個人の営みではなく集团的営みとして読み解く新しい視座をセザンヌ研究にもたらす事となった。

研究成果の概要(英文)：This research clarified the formation of Cezanne's theory of art from the point of view of the influence of Charles Baudelaire as well as of his cooperation with Emile Zola. Cezanne inherited with Zola the artistic values presented by Baudelaire like temperament, personality and originality, and shared with Zola the critic against the commercialism of the paintings by Salons' artists so that he established his own theory of art and his original technics. Further, I pointed out that Cezanne's idea of the anti-modernization, being nursed under the influence of Baudelaire, was formed in the intellectual context of his days like Henri Bergson's philosophy, August Rodin's, Emile Galle's theories of art, etc..

研究分野：美学・芸術学

キーワード：気質 感覚 自然 アンガジュモン ユートピア ナチュリズム 反近代化 反商業主義

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景

セザンヌは、自らの芸術論を二つの場所で展開している。一つは、書簡、もう一つはセザンヌと交流のあった人々が、セザンヌの語った言葉として伝えた評論やセザンヌ論である。

I. 書簡

セザンヌは、1937年、リウォルド (John Rewald) が編纂した以下のセザンヌ書簡で自身の<芸術論>を展開している：

-*Paul Cézanne Correspondance*, recueillie, annotée et préfacée par John Rewald et ornée de cinquante reproductions en héliogravure, Paris, Bernard Grasset Éditeur, 1937.

この中で、リウォルドは、207通の手紙を収録し、I. 青年期の手紙 (1859-1870) II. 印象主義時代からゾラとの友情の破綻まで (1872-1886) III. 若い友人達への手紙と絵画に関する手紙 (1889-1906) に分類した。分類通り、特にセザンヌは晩年に芸術論を盛んに展開した。

また、セザンヌ書簡を手稿から書き起こして再度読み直し、リウォルドの読みを修正する作業が近年、以下でなされている。手稿をどう読むかで解釈は違って来る。

-*Paul Cézanne Cinquante-trois lettres*, transcrites et annotées par Jean-Claude Lebensztejn, Paris, L'Échoppe, 2011.

-Alex Danchev, *the letters of Paul Cézanne*, London, Thames & Hudson, 2013.

-永井隆則「文献学 セザンヌの友情の行方をにぎる手紙を解読せよ！『美術手帖』(特集：世界一受けたい！印象派の授業) Vol.66 NO.1008, 82-87頁。

II. 同時代人の伝えるセザンヌの<芸術論>

セザンヌと同時代人でセザンヌと交流があった人々がセザンヌから聞き取ったとする芸術論は、以下にまとめられた：

-*Conversation avec Cézanne*, Édition critique présentée par P.M. Doran, Paris, Édition Macula, 1978/*Conversation with Cézanne*, Edited by Michael Doran, Introduction by Richard Schiff, Berkely/Los Angeles/London, University of California Press, 2001.

しかし、これは、テキストの全文ではなく、編集をしたドラン (Michael Doran) が自らの判断で複数のテキストを選び、かつ重要だと判断した部分を抜粋した一般向けの選集にすぎない。例えば、セザンヌの同時代人であった、デュレ (Theodore Duret)、リヴィエール (George Rivière) などの貴重な証言は収録されていない。

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

1) 書簡に関する先行研究を参考にしながら、本研究では、可能な限り、手稿に当たりながら、書簡で展開された<芸術論>を整理して解釈し体系的芸術論としてまとめ上げる。

2) 以下のセザンヌ関連文献表を指針として、可能な限り網羅的に同時代の証言全文を収集して精読し、セザンヌの<芸術論>を解明する：

-Anonym, *Bibliographie, Cézanne*(Catalogue d'Exposition), Paris, Galeries nationales du Grand Palais, 25 septembre 1995-7 janvier 1996; London, Tate Gallery, 8 février-28 avril, pp.581-587.

同時代の証言に関しては、ドランの編纂した上記文献で、ドランとシフが解題を試みているが、簡潔な解説に止まっている。これに対して、本研究は、同時代人が記録したセザンヌの<芸術論>を書簡で展開された<芸術論>及び同時代の他の言説(知的環境)と付き合いながら総合的に明らかにする。

3)申請者は、2013年、以下で、

-永井隆則「セザンヌ研究の現在 - 研究史から見る今日のセザンヌ像」『シンポジウム「セザンヌ - パリとプロヴァンス」展から見る今日のセザンヌ』(記録集)(共著)国立新美術館、平成25年3月、7-33頁。

国内外のセザンヌ研究史を網羅的に調査した。その結果、セザンヌの〈芸術論〉を扱った研究として、以下が存在する事を発見した。

-Theodore Reff, *Painting and Theory in the Final Decade, Cézanne The Late Work*, London, Thames and Hudson, 1977, pp.13-53.

-Lawrence Gowing, *The logic of Organized Sensations*”, *Cézanne The Late Work*, The Museum of Modern Art, New York, 1977, pp.55-71.

-Vladimir Vukićević, *Cézannes Realisation Die Malerei und die Aufgabe des Denkens*, Wilhelm Fink Verlag, München, 1992.

しかし、以上は全て、セザンヌ自身の言説や制作内部での分析に限定され、本研究が目指す、その形成要因、同時代の知的環境に関しては、一切、調査及び議論がなされていない。また、限られた言語に限定した簡略な解説に過ぎず、本研究が目指す体系的な〈芸術論〉の解明にはなっていない。本研究は、以上の先行研究の成果に踏まえながらも、以上指摘した問題点を以下の作業によって乗り越える。

1.1902～6年まで、セザンヌが最後の制作の時を過ごした、エクス・アン・プロヴァンス、ローヴ街道のアトリエに現在、セザンヌの遺品が残されている。その中には、セザンヌが所持し読んだと仮定される美術書等の書籍がある。アトリエの館長、フレッセ(Michel Fraisset)氏の協力を得て、アトリエに残された蔵書を調査し、同一書籍を古本屋等で買い求め、セザンヌの〈芸術論〉形成の源泉を探る。

2.セザンヌは書簡の中で多くの書籍に言及している。それらをリスト・アップして古本屋等で買い求め、書簡中に展開されたセザンヌの〈芸術論〉形成の源泉を探る。

1990年代末、セザンヌ研究者の世界的学会、Socitété de Paul Cézanne が設立されるまで、研究者間の協力が十分なされてこなかったため、誰一人、この調査をこれまで十分に行ってこなかった。申請者とアトリエの館長は親密な信頼関係ができており、この調査は可能である。

3. 本研究は、セザンヌの〈芸術論〉形成に関して、特に、ボードレール(Charles Baudelaire)、ゾラ(Emile Zola)、ジェフロワ(Gustave Geffroy)、ギヤスケ(Joachim Gasquet)、ベルナール(Emile Bernard)、ベルクソン(Henri Bergson)等の美学や芸術論がセザンヌの知的環境として大きな役割を果たしたとの仮説を立てる。彼らの著作物を収集し読み込んでいく。

特に「tempérament(気質)」「réalisation(実現)」「sensation(感覚)」「émotion(感情)」「expression(表現)」「nature(自然)」といったキーワードを軸に、以上の作業によってセザンヌの〈芸術論〉をセザンヌの言説の内部ではなく、同時代の言説空間の中で解釈し直す。この着眼は、これまで世界のセザンヌ研究者の誰一人として思いついていない。

当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

本研究は、セザンヌの〈芸術論〉を彼の生きた時代と社会の中で具体的に論じる試みであり、メルロ・ポンティ(Merleau Ponty)の現象学等の普遍的セザンヌ論の限界を乗り越えて、新しいセザンヌ論の可能性を開拓することができる。セザンヌ研究の領域で世界的貢献を果たせるものと確信する。

2. 研究の目的

本研究は、フランスの画家、ポール・セザンヌ (Paul Cézanne, 1839-1906) が書簡及び同時代人に語った言葉の中で展開した〈芸術論〉を整理してその本質を抽出し、セザンヌのアトリエに残された蔵書、並び所持した可能性のある書物のデータベースを作成して、その形成要因を探る。また、その形成要因になったと本研究が仮定する、特にボードレール (Charles Baudelaire)、ゾラ (Emile Zola)、ジェフロワ (Gustave Geffroy)、交友関係のあった、芸術家のギヤスケ (Joachim Gasquet)、ベルナル (Emile Bernard)、同時代人であって、哲学者のベルクソン (Henri Bergson)、芸術家のロダン (Auguste Rodin)、ガレ (Emile Galle) 等の美学や思想との関連を明らかにすることで、セザンヌの〈芸術論〉を同時代の知的環境の中で総合的に位置付けることを目的とする。

3. 研究の方法

1. セザンヌのアトリエの館長、Michel Fraisset 氏の全面的協力を得て、セザンヌが所持していた書籍を網羅的に調査し、書簡で言及している書籍をリスト・アップし、同一書籍を国内外の古本屋で収集し、フランス国立図書館等で複写を取り、以上を精読しセザンヌの芸術論の源泉を探る。

2. セザンヌがその芸術論を展開するにあたって参照したと本研究が仮定する、ボードレール (Charles Baudelaire)、ゾラ (Emile Zola)、ジェフロワ (Gustave Geffroy)、ギヤスケ (Joachim Gasquet)、ベルナル (Emile Bernard) 等の文献を上記と同様の方法で収集し精読してセザンヌの芸術論の源泉を探る。

3. 本研究を実施するにあたり、セザンヌ文献学研究的の第一人者、ミショー (Eric Michaud)、レーベンシュテイン (Jean-Claude Lebensztejn) から研究指導を受ける。

4. 研究成果

セザンヌの芸術論の形成を特にシャルル・ボードレールからの影響、エミール・ゾラとの共同作業という視点から明らかにした。「気質」「個性」「独創性」といった価値観をゾラと共にボードレールから継承し、サロン絵画の商業主義に対する批判をゾラと共有する事で、セザンヌが、独自の美学と技法を確立したことを示す事ができた。

また、セザンヌの反近代化思想は、ボードレールの影響下で形成され、さらに、同時代の哲学者、アンリ・ベルクソンの思想、彫刻家、オーギュスト・ロダン、工芸家、エミール・ガレらの芸術論と共鳴し合い、同時代の知的環境の中でもセザンヌの芸術論が育まれたものであった事を示した。

本研究では最終成果として二つの学説を提示した。1) セザンヌがボードレールの芸術論や思想を継承し多くの着想をそこから得ているという学説。2) セザンヌがゾラと共同作業で独特の芸術論を練り上げたという学説。以上は、これまで全く指摘されておらず、ボードレール・セザンヌ/ゾラ研究の領域に新知見をもたらした。

また、本研究は、セザンヌの芸術論を同時代の知的環境に位置付ける試みを行ったが、これは、セザンヌの芸術活動を個人の営みではなく集団の営みとして読み解く新しい視座をセザンヌ研究にもたらす事となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

永井隆則「セザンヌに於ける〈模写〉の意味」『美術フォーラム 21』第 31 号、2015 年、114-123 頁、査読有り。

永井隆則「アール・ヌーヴォーと植物、女性の表象」『中部大学民俗資料博物館連続講演記録 2015』2016 年、27-43 頁。

永井隆則「セザンヌの資料環境構築の現状」『美術フォーラム 21』第 35 号、2017 年、89-99 頁、査読有り。

永井隆則「ゾラの美術批評の再検討」Annual Report of The Murata Science Foundation, 2017 年、513-516 頁。

Takanori NAGAI, How Paul Cezanne rejected the fini concept, Kyoto Studies in Art History, Nr. 2, 2017, pp. 133-147、査読有り。

Takanori NAGAI, What Copying Meant to Cezanne, Aesthetics International, Nr. 21, 2018, pp. 111-125、査読有り。

〔学会発表〕(計 5 件)

(国際学会)

座長、日仏美術学会、『<近代絵画の父>セザンヌを再考する』2015年06月13日、京都大学
「ゴッホのセザンヌ」、日仏美術学会、『ダリオ・ガンボニ教授来日記念講演会およびシンポジウム「ゴッホとルドンに関する最新研究」』、2016年07月30日、京都大学
How Pual Cezanne rejecetd the fini concept, International Colloquim; Appreciating the Traces of an Artist 's Hand, 2016年09月25日、京都大学
「アンガジュマンとしてゾラの美術批評」、日仏美術学会、『ゾラの美術批評を再考する』2016年12月17日、京都工芸繊維大学
「セザンヌに変身するピカソ」、日仏美術学会、『ピカソと人類の美術』2017年11月10日、京都工芸繊維大学。
「ゾラはペンでセザンヌは絵筆で糾弾する」『セザンヌとゾラの創造的関係を再考する』日仏美術学会、2018年12月2日、京都工芸繊維大学。

(招待講演)

「アール・ヌーヴォーと女性、植物」シンポジウム「植物ニアリーイコール女性 2つの視点から見る接点」、2015年10月21日、中部大学

[図書](計 5件)

『<場所>で読み解くフランス近代美術』(編著)三元社、2016年。
『セザンヌ - 近代絵画の父とは、何か?』(編著)三元社、2019年。
『フランス哲学・思想辞典』(共著)ミネルヴァ書房、2019年。
『美学の事典』(共著)丸善出版、2019年。
『ピカソと人類の美術』三元社、2019年。

[産業財産権]

出願状況(計 件)なし

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者 なし

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。